東京理科大学体育局ソフトボール部

ユニフォーム変遷

改訂版

年

1977 | 1979

初代ユニフォーム（選定：初代）

記念すべき理科大ソフトボール部最初のユニフォームはシンプルにすべて白色を基調としている。
理科大で初めてのソフトボール部ということで、真っ白な気持ち、清潔感を表現し採用した。理大のマークは漢字で、硬派に重厚に、かつ鮮烈に。そしてキリッと光るストッキングの2本ラインは・・・・由来不明である。
創部当時は試合用ユニフォームと練習用ユニフォームの区別がなかった。今では考えられないことだが、練習と試合のユニフォームは同じだったのだ。練習後、コインランドリーに行きユニフォームを洗濯して次の日の試合に臨む、あたりまえの光景だった。しかし、所詮白いユニフォームは洗っても、洗剤のCMのように元の輝く白色にもどるはずもなく、汚れたように見えるユニフォームで試合に臨んだ。
甲府で行われた1978年の栄えある我が部最初のインカレ開会式において、他校の選手に言われた。「きれいなユニフォーム着て来いよ」。恥ずかしくもあり理科大らしい思い出でもある。

帽子：白
ユニフォーム上下：白
胸マーク：理大
アンダーシャツ：白
ストッキング：白（紺の２本ライン）

1979 | 1980

幻の2代目ユニフォーム（選定：2代）

初代のユニフォームから、白色を基調とすることに変更はないが、あまりにも汚れが目立つということで、せめて帽子とアンダーシャツだけでも紺色にという思いで微妙な変更をした。今初めて気づいた後輩諸君もいることだろう。
実はユニフォームも同じ白色の物を作り直したが、注文時のミス？によりユニフォームの生地が綿となってしまい、汗をかくとベトベトになり非常に評判が悪かった。

帽子：紺
ユニフォーム上下：白
胸マーク：理大
アンダーシャツ：紺
ストッキング：白（紺の２本ライン）

1980 | 1985

3代目ユニフォーム（選定：3代）

2代目のユニフォームがあまりにも評判が悪かったため作り直そうということになった。どうせ作り直すならば大胆にイメージチェンジをしようということになり3代目のユニフォームが誕生した。2代目のユニフォームが初代と同じユニフォームの生地で評判もそこそこだったなら3代目のユニフォームが日の目を見ることはなかったであろう。
ユニフォーム選びは、カタログを見ながら決めた。当時大洋ホエールズ（今の横浜ベイスターズ）が上下違う色のユニフォームを採用していたこともあり、時代の波に乗った感がある。このころから、大学のソフトボールチームも上下違う色のユニフォームを採用し始めたが、一歩先んじた理科大のユニフォームはかなり目立っていた。

帽子：紺
ユニフォーム上：紺、下：白
胸マーク：RIKADAI
アンダーシャツ：紺
ストッキング：紺

1985 | 1989

4代目ユニフォーム（選定：8代）

紺の縦縞に、左胸に大きく「R」の花文字、そして両袖に紺を入れたこのユニフォーム誕生のきっかけは、1985年4年連続1点差でインカレ予選に敗退後、気分を一新して5年ぶりのインカレ出場を目指そうという丸山先生のご指示からだった。
8代のエース佐藤、主将宇田が中心となり新ユニフォームのデザイン検討が始まった。
2つの最終候補が出揃ったところで部内で選考会（ファッションショー）を行い、その結果、このユニフォームの採用を決定した。（モデルを務めた9代山下と高尾のスタイル差がそのまま結果へ反映された形となったとの説あり。）
最初は仕上がったときは胸のRの文字が細く、丸山先生から「胸文字はユニフォームの顔、もっと太く」とのご指摘があり、Rの文字を再度太く作り直し完成に至った。
1985年秋の関東大学選手権から着用し、翌1986年5年ぶりのインカレ出場をこのユニフォームで果たした。

帽子：紺
ユニフォーム上：白地紺縞肩紺、
下：白地紺縞
胸マーク：R
アンダーシャツ：紺
ストッキング：紺

1989
|
1992

5代目ユニフォーム（選定：12代）

今までのユニフォームは厚手の生地であり、梅雨前のインカレ予選、真夏のインカレ本選を毎年戦う理科大ソフトボール部には、メッシュ生地のほうが適していると判断し、ユニフォームを変えることとなった。デザインは当時幹部の中で美的センスのある江島にお願いして作った。理科大ソフトボール部の歴代ユニフォームの中で唯一赤をアクセントとして取り入れているのが斬新である。
ユニフォームを変えた効果は絶大で、2年連続インカレ出場＆本選初戦突破を果たした。

帽子：紺
ユニフォーム上下：灰地紺縞
胸マーク：TOKYO　RIKADAI
アンダーシャツ：紺
ストッキング：紺

1992
|
1996

6代目ユニフォーム（選定：15代）

平成3年、9月以降の対外試合で1勝もできぬままシーズンが終わろうとしていた。そんな中で主将となったのは15代小笠原であった。彼はチームの沈んだ雰囲気を変えるため、当時の幹部全員にある話を持ちかけた。それは、幹部全員がお揃いのブレザーを購入して、節目に着用しようというものだった。話は他学年に秘密裏に進められ、納会時に初めてそれは披露された。納会時に驚いた部員達を更に驚かせたのが、彼から出たユニフォーム変更の話だった。当時の強豪、東海大学にあやかりたいと、今の星野ジャパンのユニフォームに似た白生地に縦縞のデザインが提案され、平成4年4月からユニフォームが変更された。他のインカレ出場校に比べて見劣りが否定できなかった我がチームが、予選では劇的なサヨナラ勝ちによりインカレ出場を決め、インカレ本選でも1勝した結果は、彼のインカレに賭ける熱い想いの結晶でもあった。

帽子：紺
ユニフォーム上下：白地紺縞
胸マーク：TOKYO　RIKADAI
アンダーシャツ：紺
ストッキング：紺

1996
|
1999

7代目ユニフォーム（選定：19代）

19代で考案した最高傑作、米メジャーのマリナーズに似たタイプ。シンプルでかつ理科大らしい爽やかなイメージを追求。また、キャップのロゴを複数文字とし、ズボンはロングタイプと、今までにない斬新なアイデアも取り入れられた。ただ、如何せんズボンがきつく、汚れが落ちにくいという欠点もあった。しかしズボンに付いた黒い汚れを見るたびに、桜島の溶岩グラウンドでの激闘が思い出される。

帽子：紺
ユニフォーム上下：白地
胸マーク：TOKYO　RIKADAI
アンダーシャツ：紺
ストッキング：紺

1999
|
2016

8代目ユニフォーム（選定：22代）

当時の理科大のユニフォームは3、4年周期で変わるのが常だった。そのことに疑問を感じ、ゴッドのお告げを受けた男たちがいた。22代幹部である。強豪校（日体、早稲田、国士舘など）のユニフォームはいつのときも変わらず、そこには伝統と強さが宿っているではないか。理科大もそうあるべきではないのかと…
しばらくはデザインの変更をしないことを前提に、OBの方へのデザインに対する意見募集、当時の大リーグで主流だった三重千鳥刺繍の採用、丸山先生のストライプ案の却下等、紆余曲折を経て完成したのが2016年まで続いたユニフォームである。またデザイン変更はユニフォームだけにとどまらず、帽子の字体やスパイクの色にまで及んだ。上から下まで随所に主将の小寺をはじめとする当時の部員の強い思いが込められている。

帽子：紺
ユニフォーム上：紺地、下：白地
胸マーク：TOKYO　RIKADAI
アンダーシャツ：紺
ストッキング：紺

NEW

2017
|
現在

9代目ユニフォーム（選定：40代）

創部から40年の節目を迎えるということで新ユニフォームを制作することになった。
今回のコンセプトは、丸山体制から柳田体制へのバトンタッチ。今までの伝統はそのままに、かつ、新しい技術を付け加えることを意識。制作していく中で“昇華プリント“の存在に辿り着いた。昇華プリントとはユニフォームに直接、文字や数字を印刷する技術のことで、今までの刺繍に比べて重量が軽く、伸縮性に富んでいるため、激しい動きにも対応しやすい。印刷であるため、制作者が思い描く複雑なデザインでもプリントすることが出来るのも特徴だ。
前ユニフォームと違いをつけるために、今回のデザインはよく見ると薄く縦縞が入っている。文字の内部は赤色で、背番号にも赤色を入れた。
メインカラーの紺色は先代を受け継ぎ、新しい技術の昇華プリントを取り入れた新デザインで日本一を勝ち取り、理科大と言えばこのユニフォーム！といわれるような黄金世代を作っていきたい。

帽子：紺
ユニフォーム上：紺地
下：白地
胸マーク：RIKADAI
アンダーシャツ：紺
ストッキング：紺

●番外編●

OB会ユニフォーム（選定：3代）

OBのユニフォームを作ろうということになり、第3代部長の本多にユニフォームのデザインを一任したところ、本多が愛知県出身で生粋の中日ドラゴンズファンだったため、当時の中日のユニフォームに似たものとなってしまった。現役から見ると、このOBユニフォームは一種のステータスであったが、時の流れは容赦がなく、今なおOBユニフォームを見事に着こなせるOBは数少ない。理科大ユニフォームの歴史の中で唯一ボタンのないプルオーバータイプ。

帽子：紺
ユニフォーム上：紺地肩白
下：白地
胸マーク：RIKADAI　CLUB
アンダーシャツ：紺
ストッキング：紺

理科大CLUBユニフォーム

理科大クラブというクラブチームをご存知だろうか？関東地区の理科大ソフトボール部OBを中心に昔執った杵柄でストレスを発散しようというチームである。当初はOB会のユニフォームで活動をしていたが、学内指導員の門田さんの力投もあり、結成3年目にして全日本クラブチーム選手権大会に出場を決めたことを機にユニフォームを制作した。チーム名は「Rikadai　OB」の頭文字を取って「ROBスターズ」にとの案もあったが「エビかよ！」の一言で却下となり、無難に「R　CLUB」となった経緯がある。
ユニフォームはJAPANのビジター用をモチーフにしたタイプで好評を博しているが、残念ながら現在はよんどころない事情により活動休止中である。

帽子：紺
ユニフォーム上下：灰地縦縞
旨マーク：R　CLUB
アンダーシャツ：紺
ストッキング：紺

部旗変遷

年

創部
|
2016

初代・2代目部旗デザイン

体育局準加盟（同好会）から正式に“部”として昇格した1978年11月。他大学ソフトボール部は部旗を有していたが、理科大ソフトボール部は持っていなかった。
丸山先生の提案もあり、初代部旗には創設期メンバー（初代・2代）の名前が記されている。
初代部旗のインカレデビューは1981年8月21日、第16回全日本大学選手権大会（山口県宇部市）。開催地出身の田中氏（5代）が旗手を務めた。

創成期は今のような立派なグラウンドも専用部室も何もなく、与えられた広場のようなところで雑草をむしりながら、グラウンド整備をしていた時代から受け継がれてきたデザイン。
「東武野田線に部旗忘れちゃった事件」など、当時の現役の成長を見守ってきた。

2代目部旗は1992年（平成4年）に、初代部旗の老朽化を理由に卒業生からの寄付にて更新。デザインはそのまま引き継がれた。

NEW

2017
|
現在

3代目部旗デザイン

今まで各団体ごとに作成していた部旗を2017年に全キャンパスのⅠ部体育局で統一することになった。
これまで体育局とはいうものの、各部はそれぞれで運営を行い、各々のために、それぞれのやり方で成果を上げてきた。

各団体に「東京理科大学の看板を背負っている」という自覚と責任感を持たせるために、さらにはバラバラだった各団体が仲間意識を持ち、体育局を中心に東京理科大学全体を盛り上げることを狙って、デザインが統一された。

東京理科大学の公式マークとフォントを使用したデザインとなった。